



君の自画像

吉田 史子
(岩手)

一年半前

ギャラリーの予約をしたる日のゆふべ大きな虹見ゆ東の空に
起き上がりうづくまること繰り返し夫のぬない二年が過ぎぬ

われと会ふまへの自画像見つけ出し半世紀ぶりの風に当てたり

父の絵の変遷見たしと選ぶ子は決めかねてゐる作品の数

五月「第二回遊遊かのどけ辛あつ家展」を開く

かの日の虹ころろに抱きて開きたりわれら家族の展覧会を

ギャラリーの白き壁背に自画像を掛ければ君の二十代がゐる

若き日の君の自画像 まなざしの真つ直ぐ届く子にもわれにも

子の描きし父の肖像 真向かひてわれはたちろぐあまりに君ゆゑ

夫の孫のデッサン七十数枚

痛む手をなだめて描きしデッサンにみどりこの顔いきいきとせり

「自画像は〈自我像〉なり」といふ言葉忘れがたしと君の教へ子

さびしさは怒りにも似てあふれきぬこの家族展にひとり足りぬ

愛されてゐしわれらなり苦しみのけはひを見せぬ家族の素描

「いつだつてあなたは謎」とからかへばただ笑ひをり 別れも知らず

笑つてゐるから幸せなわけぢやない地を這ひてゆく朝顔の紺

幸せでないから絶望なわけぢやない朝顔のつる天に伸びゆく

このごろの私
庭を眺めている。旺盛な草

木の生命力に圧倒されてただ眺めているだけである。最近
は住宅地でも熊が出るから茂
みの草刈りをするようにと言
われ、わが家の庭も茂み?と
恐れおののいている。



エオス
暁

尾花 照子
(福岡)

このごろの私
大河ドラマ「光る君へ」を
観て、装束や調度の美しさに
ほれほれとしています。『紫
式部日記』には走る女房が登
場しますが、重い単を着て走
るとは、頼もしい女房もいた
ものだなと思っています。

うすぐれの夏野にたちて万華鏡まわせば宇宙のひらきゆく音

夏の月天神ゆけば地下街のグラスの音の足裏にふる

みずぶくれ梔子染めの夕かぜにさらせばこぼす労働の歌

ゆうやけの天満宮の参道に覗かれながら聖たちたり

ゆうぐれの金木犀の香の河を人わたりゆく巡礼のごと

秋夕映ガラス埋めこまれた街は胸どの傷の薔薇を飾りぬ

「大丈夫、まだだいじょうぶ」と息とめて秋のひかりを受けいれる河

瞳の奥にほろべるものの声きえて砂時計アワレーグラスにしずむ白鳥

わだつみであれば観覧車の鏽をふる雪として全身に受く

太陽の脱ぎすてた火のなびくのを砂丘にながむ縞瑪瑙オニキスの夜

黄水晶シトルリンの丘へのぼれば青月のぐるりをゆるりめぐるアロワナ

はじいたら澄んだ音色の青月は金茶殿茶とのちやの星こぼしつく

貝殻の裏をかえせば街はきえ星ふる夜の百物語

ひとなべていだく塔あり君の眼を岬の月とおもいつつ寝る

古夢にみなし児の泣く声ありてそつと暁エオスは闇を出でゆく